



その時心が動いた「今、私にできること」

復興のため、地域交流の機会を守るためにできることを

2023年12月2日、宮城野区高砂市民センターで開催された「ウィンターフェス」には、地域内外から老若男女が詰めかけました。歌や打楽器の演奏、朗読などでステージを盛り上げたのは、東日本大震災後から高砂地区に心を寄せ、フェスに関わってきたプロのアーティストたち。企画運営は、県内外のメンバーによる「平日フェス実行委員会」を中心に、高砂市民センター、高砂第一、第二、第三民生委員児童委員協議会（以下、民児協）、市民団体の「なかのふるさとYAMA学校」です。フェスは、復興や地域住民の交流を目的に、2015年から2023年まで、試行錯誤しながら計9回開催。共に歩んできた高砂市民センターの改修工事などに伴い、実行委員会で協議をし、今回でファイナルを迎えました。実行委員会の砂子啓子さんと金子直美さんは、「これまでの経験を踏まえ200%の準備で臨んだ。悔いはない」と胸をなでおろします。

砂子さんと金子さんは、2011年3月、住んでいた泉区で被災しながらも「被災地のために何かしたい」と、支援活動に奔走する中で出会いました。2人が高砂地区と関わるきっかけになったのは、当時、「音楽で高砂を元気に!」を掲げ地域を引っ張っていた第三民児協の「つい子さん」等が主催する音楽イベントのお手伝い。砂子さん一家が引っ越しで宮城県を離れた後も、揃って高砂に通い続けていました。しかし、2015年についさんが病気で他界。旗印を失い、音楽を通じた交流の場も途絶えようとしたとき、想いを継ごうと手を

挙げたのは砂子さんでした。「住民でもない外の人間が受け入れられるだろうか」と、不安を抱えながらも金子さんと実行委員会を立ち上げると、当時の高砂市民センター職員たちが活動をバックアップ。砂子さんたちの思いに共感した地域外のアーティストやアナウンサー、デザイナーなどができることを持ち寄るようになりました。また、館長・職員の異動や市民センターの運営方針の変更により、フェス継続が危ぶまれたときには、民児協が橋渡し役に。砂子さんたちとのこれまでの歩みや、フェス開催の意義を市民センターに力説してきました。第三民児協会長の加藤信一さんは、「高齢化する民児協で、地域交流の機会を企画し続けることは難しかった。砂子さんはじめ実行委員会の皆さんには感謝しかない」と振り返ります。約10年で、高砂地区に関わる人たちの輪がひろがり、新たなまちづくりの担い手との出会いも生まれました。2人は「これから先も、地域の交流が深まりますように」と願います。

平日フェス実行委員会



▲Facebook



▲のべ200人以上が来場



活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

ぼくらの地球の治し方
—アヤシイ社会活動家の「つながり」と「挑戦」の話—

筆者は、旅先のギニアで製氷工場が稼働せず困っている人がいることを知り、後先考えずに工場再建に奮闘しました。また、ネパールやバングラデシュで孤児や貧困家庭への食事支援にも取り組みます。本書では、筆者が世界で起きている理不尽に対し、無関心で終らせず、自分にできることを考え行動する姿が描かれています。自分の身に起きていることと世界の様々な「ゆがみ」はつながっている、そんな思考の変化を呼び掛けています。

著者：藤原ひろのぶ 出版社：フォレスト出版



つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日 3月13日（水）、27日（水）

開館時間 月曜日～土曜日 9:00-22:00
日曜日・祝日 9:00-18:00

休館日 毎月第2・第4水曜日（祝日の場合は翌日木曜日）年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3

TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042

[ホームページ] <https://sapo-sen.jp>[サポセンブログ@仙台] <https://blog.canpan.info/fukkou/>「ばれっと」バックナンバーは
ホームページからダウンロードできます。

ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行

仙台市市民活動サポートセンター
（指定管理者：特定非営利活動法人
せんだいみやぎNPOセンター）

発行日 2024年3月1日

デザイン PEACE Inc.

[X(エックス)]

@SCSC4CA

[YouTube]

サポセンちゃんねる



ばれっと 3

仙台市市民活動サポートセンター通信 ばれっと



一歩踏み出す気持ち芽生える「ワクワクビト」

学びとつながりで
災害から命を守る

独身女子防災プロジェクト 北村 育美さん(41)

北村さんは、仕事の傍ら災害支援団体のメンバーとして、一般向けに防災講座や避難所運営ワークショップ、団体同士の情報交換の場を開いています。2023年9月からは、個人的に「単身・独身・働き女子のための防災カフェ」と題した交流の場づくりを始めました。お茶を飲みながら、東日本大震災での経験を持ち寄り、日頃の備えを確認したり、互いの知恵を交換したりします。北村さんは「災害時の、単身女性たちの不安や心細さを解消したい」と思いを話します。

北村さんの災害・防災活動の始まりは、2004年10月の新潟県中越地震で被災した際、「地元のために何かしたい」と、ボランティア活動に汗したこと。その後、様々な被災地で避難所運営や復興のまちづくりに関わりました。防災カフェ企画のきっかけは、東日本大震災後、支援のために単身移住した福島県で、2回の地震と台風を経験したことでした。「自宅避難で一人、余震や川の氾濫に備えて過ごす夜は不安でいっぱいだった」と振り返ります。不安を軽減してくれたのは、これまで培ってきた防災の知識と、友人たちからの連絡。我が事として、同じような状況に陥るかもしれない女性たちのためにできることを考えるようになりました。

「災害時、不安な心や命を救うのは、多様なつながり」と、実感を込める北村さん。危惧するのは、働く単身・独身者の中には、

特集

まちと人を元気にする移動手段
「荒井モビリティ」

“ばれっと”には、仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）にいろいろな人が集まり、それぞれの色（個性）が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。



主なコミュニティが職場で、町内会など、地域との関わりが少ない人が多いことです。また、パートナーを含めた「家族ぐるみのお付き合い」がなかったり、子どもがいなかったり場合は学校を通じた交流がなかったりし、有事の際にその存在が見えにくくなることも課題に感じています。「世間から見れば、高齢者でも障がい者でも、妊婦でもないため“一人で大丈夫でしょう”と思われる。支援の対象にならず孤立を深めている」と話します。さらに女性の場合、秩序が乱れる避難生活での性暴力や性被害が問題になることも。防災カフェでは、平時からある女性の立場の弱さ、妻でも母でもない生きづらさが話題に上がることもあります。

能登半島地震を受け、北村さんは「一人じゃないと思える場をつくりたい。学びとつながりで、一人でも多くの命を救いたい」と、活動への思いを新たにします。

単身・独身・働き女子のための防災カフェ

2ヶ月に1回、サポセンなどの公共施設で開催しています。参加者が住む地域のハザードマップや非常持ち出し袋の中身を確認したり、マイタイムラインの作成をしたり、今すぐできる具体的な備えについて学び合います。

次回開催

日時 2024年3月24日（日）13:00-14:30

会場 仙台市市民活動サポートセンター4階 研修室3

Mail dokushinbosai@gmail.com▲防災カフェにて、自身のポーチに常備する
日常食や緊急用ホイッスルを紹介する北村さん



特集

協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」

まちと人を元気にする移動手段「荒井モビリティ」

仙台市若林区荒井は、仙台駅から地下鉄東西線で約15分の荒井駅周辺に広がるエリアです。長期にわたり計画的なまちづくりが進められてきました。移動手段をつくることで、活気あるまちにしようと思いをひとつに進む、協働の取り組みをご紹介します。

地域の人と一緒に価値あるまちづくりをしたい

地域に貢献して、企業も成長する



一般社団法人
荒井タウンマネジメント

代表理事
わいない さだあき
和井内 貞明 さん



産電工業株式会社

代表取締役
たかはし まさかつ
高橋 昌勝 さん

みんなが住みやすいまちを目指して

かつて田園地帯だった荒井地区は、仙台市地下鉄東西線の開通を視野に、市街地化が計画されてきました。2004年、住民・事業者・行政・NPOによる「街づくりを考える会」が発足し、2005年には、最初の地権者集会が開かれました。2009年からは、地権者有志が勉強会を実施。その後、土地の再分配などを行う土地区画整理組合（以下、組合）が設立し、和井内さんが副会長を務めました。2011年、東日本大震災の発生を機に、荒井は、被災者の住宅再建地として、復興公営住宅の計画が追加され、新旧住民が混在するまちになりました。震災後の住民の関心は、1つのエネルギーに頼らない暮らし。エコタウン実現に向け、組合は事業者の協力を募りました。意欲ある参加事業者の中に、豊かな社会づくりを目指す電気機器メーカー、産電工業株式会社（以下、産電）の高橋さんの姿もありました。2012年、組合と民間事業者は、市街地整備や価値向上を目的に「荒井東まちづくり協議会」を発足。都市整備からまちを育む段階へ進むと、2013年、協議会を一般社団法人荒井タウンマネジメント（以下、荒井TM）に進化させ、地域のコミュニティ・賑わい創出などに取り組んできました。

荒井TMの計画の中には、かねてよりコミュニティバスの構想がありました。その構想が、本格的に動き出したのは、2020年。産電の新社屋が、荒井駅から徒歩20分の場所に移転し、平日朝夕に通勤バスで社員の送迎をしはじめたこと。高橋さんは、バス導入当初から、「日中の空き時間を利用し、地域の足に活かせないか」とアイデアを温めてきました。両者は、この取り組みを「荒井モビリティ」と名付け、実証実験に乗り出しました。仙台市も2021年から、助成事業を通じて、この取り組みを後押ししました。

実験を重ね荒井オーダーメイドの移動手段を

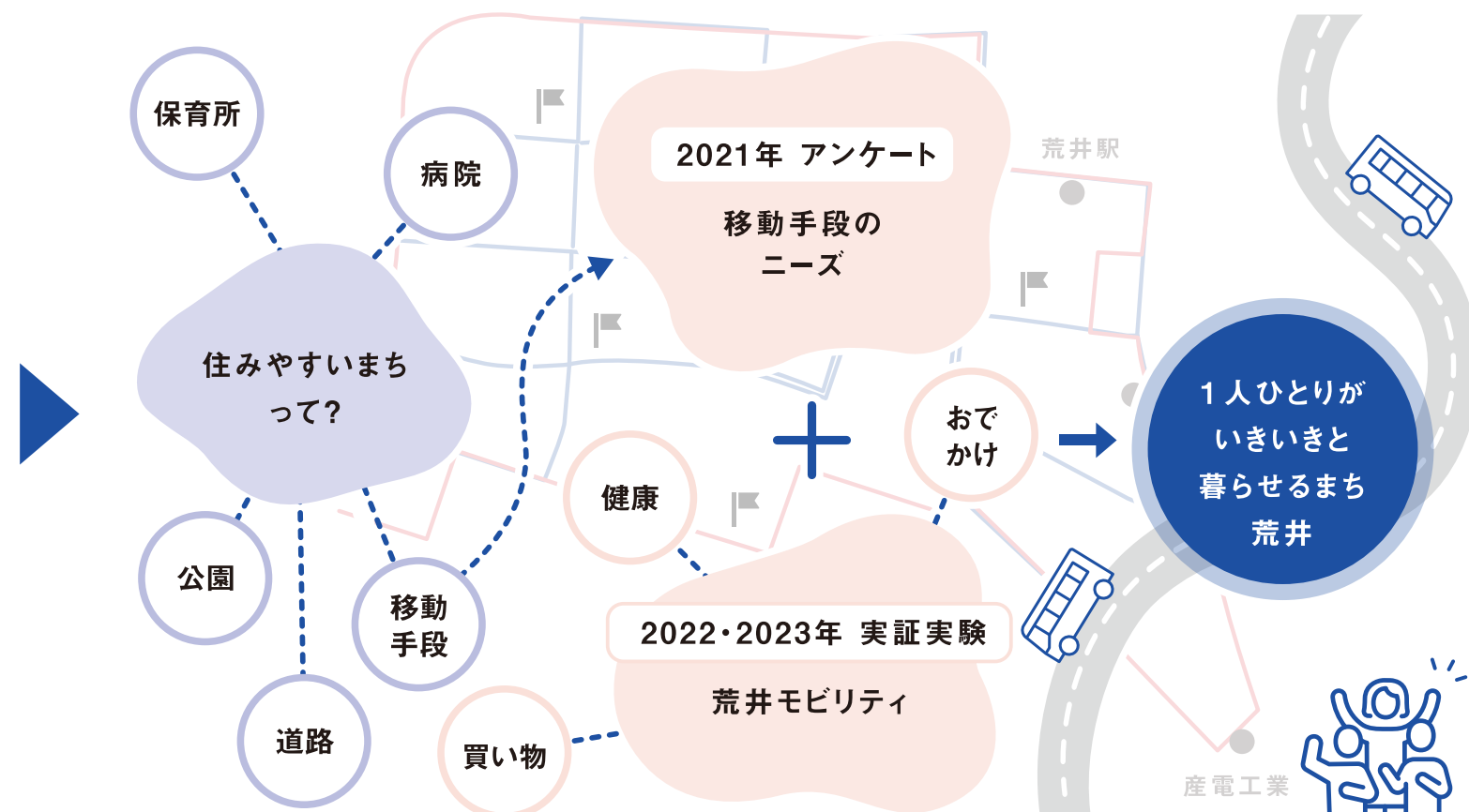
荒井TMには、日頃から地域の人が、「イベントをしたい」という提案や日常生活の雑談で立ち寄ります。中には、「路線バスの本数が少ない」「バス停が遠い」など、外出をためらう声もありました。まずは住民のニーズを把握しようと、1年目の2021年に取り組んだのは、町内会の協力を得ての2,400世帯を対象にしたアンケートです。持続的な移動手段の開発のため、曜日や時間帯の需要、目的地などニーズを丁寧に調査。その結果、買い物目的が多く、頻度は週に2〜3回、時間帯は10〜11時と14〜16時が多いことが分かりました。

アンケート結果を受け、荒井駅、市営住宅、スーパー、病院などの24の乗降車スポットを設置。専用サイトに登録すると、スマホでこれらのスポットから乗り降りできる仕組みを作りました。2年目の2022年冬には、協力者の住民45人が運行実験に参加しました。荒井地区の運行に特化したシステム開発には、社内にICT部門を持つ産電が、自己資金も投入し、腕を振りました。産電では、地域の活性化が、自社の成長には欠かせないと考えています。



▲荒井モビリティ実証実験の様子

移動手段で地域住民の交流を促進&まちの活性化



3年目の2023年は、利便性の向上を目的に、協力者74人を対象に実証実験を実施。スポットも45地点に増設し、サイトもQRログインに変更するなど改良を加えました。秋に12回、アンケートを踏まえ曜日を变えて、冬にも13回運行しました。荒井TMは、住民にバスの呼び出し方法を教えるなどの相談窓口を担当。荒井TMの元には、「行きはバスに乗り、運動不足だから帰りは歩いてみた」、「ガラケーなので、スマホを持っている友人と一緒に出掛けた」など住民の声が寄せられました。移動手段があることで、住民がまちへ出て楽しく過ごしたり、交流したりする風景に、「産電さんが、地域の人のニーズに合わせ、対応してくれたおかげ」と荒井TMメンバーは手ごたえを感じています。



▲乗車した協力者から声を集める

安心して活気あるまちへ

荒井モビリティ継続のため、現在は、車内広告の協賛や月額利用料などを検討しています。高橋さんは、「周りの企業にも、まちづくりの視点から何ができるか考え、一緒に取り組んでもらえたら」と、事業者も巻き込みたい考えです。和井内さんは「これからも荒井モビリティを使って、まちにたくさん出かけてほしい」と希望を抱きます。目指すのは、単なる移動手段ではなく、その先にある誰でも暮らしやすいまちです。

この取り組みは、令和3年度から、仙台市の地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業（PPJ）を活用しています。



▲PPJ

一般社団法人荒井
タウンマネジメント



HP▶

産電工業株式会社



HP▶